

第十二編
生
活



除雪風景

第一章 昔の生活

一 概 要	六七三
二 電 燈	六七四
三 囲 炉 裏	六七六
四 奇 習	六七七
(一) 夜 這	六七七
(二) 籌 木	六七八
五 ささやかな楽しみ	六七九
(一) 伊勢音頭	六七九
(二) 磯 節	六七九
(三) 浪花節と田舎芝居	六八〇
六 節約の布告	六八一
第二章 今の生活	六八七
一 中流意識	六八七
二世 相	六八九
(一) 外来語の氾濫	六八九
(二) インスタント食品	六九〇
(三) ラジオとテレビジョン	六九〇
四 流行語に見る世相	六九四

三 米相場の変遷

三 米相場の変遷	七〇〇
四 現在の地価	七〇七
五 消費者物価	七〇九
六 国の予算と暮らし	七一六
七 出産・結婚・葬送	七一八
(一) 出 産	七一八
(二) 結 婚	七二一
(三) 葬 送	七二四
八年の瀬	七二七
第三章 ふるさと祭り	七三〇

第一章 昔の生活

一 概 要

面河川は、御三戸で久万川と合流して土佐に入り、仁淀川となつて、太平洋に注ぐ。流域としては、南に開いては、古来の面河村は全く陸の孤島であつた。行政上は、久万代官所、松山藩の支配下にありながら、割石・井内峠の山並みが、道後平野に向かつて、高くそびえ、いつそうその感を深からしめた。

こうした土地に移り住んだ祖先の人々の移動は、相名峠から梅ヶ市・妙へ、割石峠から小網・市口へ、井内峠から前組へ、七島方面から本組へと、それぞれの経路を推測することができる。

丸木柱に萱の屋根、囲炉裏いろりに籬むしろ・玉蜀黍飯とうきびめし、これがその当時の暮らしのパターンであつた。

ここは伊予の地の果て、衣食住の自給自足、急傾斜の山畑で、死の直前まで働き、起伏に富んだ地形と労働、そして山菜の自然食、それがほどよく適応して、小柄だが強い生命力、健康を維持し、若者は、力石ちからいしで体力を競い、素人相撲にその筋骨のたくましさ誇つた。特に明治三十七・八年（日露）戦争には、難攻不落といわれた旅順要塞、東鷄冠山の攻略に第三軍の主力部隊として活躍した四国軍団の精鋭、予州健児、柚川男子も、それに名を連ねている。

石鎚山と面河川・険阻な地形と急流・石鎚おろしの寒風・清き水・原始的な生活・天の配剤は、がん健なる百姓男を育てたのであろう。婦人もまた、妻であり、母であると同時に、百姓仕事の担い手でもあつた。この地、この暮らし

しをこの世の唯一のものと達観した心の安らかさ、子供を多く産み、しかも母乳は豊富であつた。

玉蜀黍は、古くからこの地方の主食、何はともあれ、まず第一に、山林を切り開いて、玉蜀黍作りに専念した。そして、その作高は、貧富のバロメーター、出来秋には、家々のイナキに晴々しく架けられたのである。

この玉蜀黍は一四九〇年代（明応時代）、コロンブスが、アメリカ大陸から、スペインに持ち帰り、その後約三〇年間に、全ヨーロッパに広がった。日本へは一五七四年（天正七年）、ポルトガル人が、長崎へ持ち来り、それが、九州・中国・四国へと伝わった。山畑の荒地によく育ち、飯・ハツタイ粉・ハナコ団子・牛馬の飼料としても広く利用された。特に、トウキビ飯は、この地方の代名詞のようであつた。

玉蜀黍に次ぐ主食は、麦・粟・稗などがあげられるが、昭和三十五年（一九六〇）政府は国民所得倍増計画を決定、高度経済成長政策開始の大波で、山村農業は一八〇度の変化を余儀なくされた。伝来の雑穀農業を捨てて、ある者は平地へ、工場へ、残れる人々も、土木工事、サーピス業などへ転じた。それと同時に主食は、米となり、交通の発達は、消費物資の豊富な出回りを促し、高カロリー、高蛋白の都市型食生活に切り替わり、農家でありながら、野菜を買う状態にさえなつた。まさに暮らしの一大転換ともいふべきである。

一 電 燈

一八七八年、アメリカ人トーマス・エジソンは、白熱電球を発明した。明治十六年（一八八三）、東京電燈会社が設立され、明治二十年一月東京市内に配電された。

明治三十六年（一九〇三）、伊予水力電気株式会社が、松山に設立、初めて松山に電気の燈がついた。

同 スル モノ ナシ	除 クノ 外 之 ト 光 ヲ	如 シ 實 ニ 日 月 ヲ	達 シ 恰 モ 白 晝 ノ	數 十 町 ノ 遠 キ ニ	光 ヲ 發 シ 其 光 明	エ レ キ 器 械 ヲ 以 テ 火	点 スル ニ 非 ス シ テ 一 ノ	新 發 明 ニ シ テ 他 ノ 火 ヲ	電 氣 燈 ハ 米 困 人 ノ
---------------------	----------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---	--	--	--------------------------------------

当時の新聞広告

明治四十年（一九〇七）、上浮穴郡柳谷村落出に、水力発電所が新設され、松山方面へ送電した。しかし上浮穴郡内は、その配電を受けることなく、久万町に電気の燈がついたのは、大正四年（一九一五）久万電気株式会社が発立されてからである。

昭和十年大味川本組の、高岡輝吉（村会議員）らが中心となつて、本組部落の事業として、当時の仕七川村竹谷から、くるすの峠を越えて、電線を引き、本村で初めて、本組に電燈がついた。

松明から油（菜種油）・ローソク・石油（ランプ）と移り変わった燈の交転も、現在はほとんど、螢光燈に定着した。

このように、当村の電燈は、昭和十年から逐次村内に及んだのであるが、それよりさき大正九年（一九二〇）二月、自家用電気が洪草の一部に点燈された。

電第一三二号

広島通信局

愛媛県上浮穴郡柚川村大字柚野
百五番地 重見丈太郎
大正八年九月廿八日附申請自家用電気工作物施設之件認可ス
大正九年二月四日
広島通信局長 蒲原久男 印

当時のインテリ、新進気鋭の実業家重見丈太郎（村会議員）は、割石川の水を利用して、水力による発電をなし、動力として製材、その余った電力をもって、役場・巡査駐在所その他に点燈し、さらに芝居・活動写真（映画）などの興行の際にまで電燈・電気を供給した。

しかしこれは、重見丈太郎の勇み足であった。電気事業法違反であり、昭和九年十一月、監督官庁の広島通信局から電力の供給を中止するとともに右供給した事由、点燈場所を詳記せる仕末書の提出を求められた。これも当時の先駆者重見丈太郎と電燈に関する一つのエピソードである。

三 囲 炉 裏

農家における囲炉裏は、生活の中心であった。一家の主婦は、朝起きれば、まず囲炉裏に火を付ける。中心に自在鍵が下がる。常に茶釜が掛けてある。飯・菜すべての煮物、周りの灰の中にさした竹串の芋の「でこまわし」・玉蜀黍焼・その他の焼物、炊事万端に欠くことのできないものであったが、また、一方暖房と一家団欒の中心でもあった。

囲炉裏の四角から大きな木（株）、それにコマギを添えて燃やすのである。夜業するのも囲炉裏端、親と子、兄弟の対話はもちろんのこと、囲炉裏は来客のもてなし、応接間の役割さえ果たした。

煙で黒光りする天井・屋根裏・囲炉裏の火の歳月を重ねたことを物語っているものである。

それが現在、炊事はプロパンガス、暖房は石油ストーブとなり、囲炉裏は姿を消した。もはや炉辺会談は望むべくもない。

昭和五十二年（一九七七）新築の面河村役場庁舎の暖房は、重油によるセントラルヒーティング方式となり、都市の暖房となら変わることがなきまでに至っている。

四 奇 習

(一) 夜よ 這ばい

夜這とは、男子が女子のもとへ、夜忍んで行くことである。当地方では、大正時代まで、この風習があった。現在のように、若き男女の自由な交際はほとんどなく、青年会も男子のみの組織でその交流はなかった。夜這は男子の女子狩り、年ごろの娘を持つ親もやぼはいわず、半ば公認でさえあった。

これと思う娘の家へ、夜そつと忍びこみ、くらやみの中の男女はあるいは結ばれ、あるいは片思いの恋に終わり、ふられて帰ることも、しばしばであった。

しかし、それは必ずしも結婚の前提とはならず、今でいう、プレイボーイの遊びに、あとで泣く娘もあった。

部落には必ず若い土宿しやどがあり、そこを根城にして、夜道の四、五キロもなんのその、目星をつけた娘のもとへ、提灯ちとうちんを頼りに、山坂を越えてでも通うのである。思うて通えば、千里も一里とか。

村芝居の夜、岩屋寺の節分お通夜などは、若い男女の今でいう社交の場でもあり、見初め、会い初め、思い初め、やがて、それが「硯すずり引き寄せ、墨すみすりながら」に始まる文ふみ（恋文こいぶみ）のやりとり、そして愛を確かめあう夜這となるのである。

常日ごろ、なんの娯楽もなく、夜をもて余した若者のエネルギーのはけ口、じつと待つ女子も、意中の人の夜這に、胸をとぎめかし、夜を語り明かしたかも知れぬ。

その冒険と期待、知る人ぞ知る一つのロマンである。そして、この夜這を許した当時の社会もまた愛すべきものがある。今のように、教養とか、知性とかに律せらるることなく、自由奔放、一見ばかばかしささえうかがえるその風土は、また、なんとなくほほえましいものがある。

(二) 籌ちゆう 木ぎ

籌木とは用便(大便)の際、尻をぬぐう木片で、またの名を搔木(この地方では落とし木)ともいった。これは日本中に通じた用語である。

幅約三センチ、長さ約一五センチほどの薄い木片、椴・杉などの柁目まきめのよい材料を手で割って作るのである。便所に備え付けの木箱などに入れて置き、用便が終わると、この木片で要領よくふくのである。用済みのものは別の竹箆などに入れて、それを集落で決められた所定の場所に、つまり川の洪水で流れるような所に捨てるのである。便壺の中に落とさないのは、下肥しもごえはくみ上げて、畑の肥料にするからである。

これは、紙のない時代の生活の知恵である。今考えるとずいぶん乱暴なように思われるが、決して痔ぢにもならなかった。この地方で紙を使用するようになったのは、昭和二十年以降である。紙のない時代の一つの暮らしの工夫である。

五 ささやかな楽しみ

(一) 伊勢音頭

伊勢音頭とは、伊勢(三重県)地方の歌謡で、古い源としては、伊勢踊りがあつた。伊勢古市ふるいちの遊里で歌われた長唄式の俗謡である。伊勢参宮(お伊勢参り)は、最も大きな信仰であり、この地方では、海を渡って行く長い旅行でもあつた。そうした人々がお伊勢土産として、それぞれの国へ持ち帰り、全国的に広がった民謡であり、踊りである。

伊勢は津つで持つ、津は伊勢で持つ、尾張名古屋は城で持つ

正月・祭礼その他の酒宴は、部落のつきあい、親睦の場、伊勢音頭と伊勢踊りは、欠かせない余興であつた。

(二) 磯 節

茨城県大洗町おおあらい磯浜から起こった舟唄で、

磯で名所はお洗様よ

松が見えますほのぼのと

大正の初め、それを変曲した新磯節が、三味線のリズムに乗って大流行した。

今の流行歌は、テレビを通して、若者からである。大正時代までの流行歌は、中年からである。足でロコミで伝えられたものである。これも世相の一断面を物語っている。

(三) 浪花節と田舎芝居

浪花節ななわがせつは、伝記・戦争物語などを題材にして、平明な節・調しらべをつけて、三味線の伴奏で独演するものである。その発祥地は浪花の地・大阪である。ちよんがれ節・うかれ節ともいって、明治時代に大流行した。もとは説経せつぎょう、祭文さいもんから転化したもので、浪花伊助を祖とする。東中軒雲右衛門・吉田奈良丸などの功は大きい。その節回しに酔い、物語の節に感動したものである。勸善懲惡・義理人情を説き、現在でも、浪花節的人間などといわれる言葉に象徴されている。平凡ながらよき時代であったともいえる。今でいう浪曲である。

田舎芝居に代表されるものは、歌舞伎である。遠くは阿波国から、近くは大州地方・川瀬村(久万町)辺りから巡業に来た。

人形芝居(文楽、一名デコ芝居)の本場は阿波の国、近くは大谷文楽(大州地方)などがある。洪草には早くから常設の小屋があったが、その他は集落の農家で興行した。浄瑠璃じょうろうり・三味線に合わせて、人形を操る、日本固有の人形劇で、今は文楽という言葉で代表されている。

歌舞伎、特に人形の操り芝居は、自然とこの地に浄瑠璃の流行をもたらした。遠くから師匠を招き、同志相寄りけいこをしたものである。

袴かみしもをつけて高座に上り、見台の前に、一席ぶって人形を動かすのが無上の光栄であつたらしい。実に優雅な、情緒たつぷりの、その当時の言葉でいう「なぐさみ」である。

六 節約の布告

藩政時代から明治新政府となり、行政は一新されたけれど、山村僻地の百姓の生活そのものは、旧態依然、新しい時代の恩恵を受けることは、日暮れて道遠しの感であった。

まず入るを計って出づるを制す、しかもその暮らしは、一口にいつて、働いて、食って、寝るにすぎないものもあった。節約の一端をうかがうものに、大味川本組の明治十五年（一八八二）永代日記を抜粋して参考に供したい。

節檢ノ方々左ノ通定ル

- 一 酒類ノ儀ハ小売者於テ帳附売方一切相禁シ居酒屋等ハ素ヨリ不相成無余儀酒入用節ハ扱方ノ見込ヲ立惣代ヨリ書付ヲ相添酒
店に持お伺可申事
- 一 遊芸等ノ儀ハ正中ト内間相当ノ樂ハ致トモ二月ヨリハ一切相禁シ申事
- 一 人別内間おごりケ間敷儀ハ勿論ナレ共節句祭礼ノ外ハ生海魚等一切相用ヒ不申事

明治十六年二月六日

惣代	松本百蔵
外	五名
議員	中川勇蔵
同	松本浅次
組長	菅万太郎

門松門杭ノ儀ハ枝松ニ限り門松ハ椽、桧ハ堅ク禁其他ノ木ニテ相濟セ可申支、

但シ自分ノ持ニ有之松椈松ト雖モ難ク禁ノ支

犯ス者ハ其度々金拾銭ヲ徴集

これは、明治二十二年九月の申合せ事項である。

明治二十四年四月の申合せに次のようなものがある。

当村内（註本組）ハ土地ノ割合ヨリ人員等モ追々増加致来候ニ付テハ薪等モ不足ヲ生ズル様相成ニ付向後寄留人ハ一切相断可申候定メ

今般ノ規約ヲ犯シ自意寄留ヲ許シタル者ハ金五拾銭ノ罰金ヲ申付其罰金ヲ申タリ共尚再度留置スル者ハ又五十銭ノ罰金ヲ附加ス

寄留人ニシテ抱ヘ人ヲ置キ商売等ヲ致別ニ竈ヲ据置スル者ハ一ケ年村税木代トシテ金貳円ヲ納付サシム
 なお、職人、日雇人の賃金も、集落協議の上、決定している。

職人並日雇人日役本年ハ左ノ通来歳ハ村方組方申合ノ上当件ヲ適用ストセザルトハ其ノ時ノ申合せニ依ル

一 男 上賃一人役 六銭下四銭

女 四銭ク三銭

一 職人一人役 拾三銭

飼犬について次のような定めがある。

手餌犬ハ当村（註本組）村内ニ四足（註四足）ト相定メ此定ヨリ上ヲ餌ヒタル者左記条件ニ依テ処分ス

但定アリタリ共餌ハサル餌トハ其組ノ勝手タルベシ

一 菅行野組一足 上西中通一足

今 窪一足 岡田長谷一足

前条ノ定メヨリ余分ヲ餌置ク者ハ一円ノ罰金ヲ申付犬ハ組長立会ノ上殺失スル事

他組ノ分ヲ其ノ組ニ餌ヒタル等総テ犬ハ前記定ヨリ外ヲ禁ズ

以上は明治二十四年四月の規約であるが、明治三十四年十二月、上浮穴郡参川村(小田町)には、飼犬契約書なるものがある。以下それを抜粋してみる。

飼犬契約書

一 今般飼犬取締ニ関スル部落人民協議ヲ遂ケ左記拾ケ条ヲ契約シ明治参拾四年拾貳月壹日ヨリ履行ニ決定シ后日異議ナキ為

一同連署調印ス

第一条 飼犬ヲナサント欲スル者ハ壹疋ニ付壹ケ年五円ヅ、ヲ損害トシテ村内エ納付スベシ

第六条 部落ニ於テ飼主ナク野犬トミナスベキ者ハ部落費ヲ以テ撲殺ス

第八条 飼犬ノ為メ多分損害ヲ請ケタルモノハ組長ニ申出相当ノ損金ヲ申請スベキモノトス

(この項は上浮穴郡小田町上川、竹内定往氏の提供による)

明治三十三年旧八月十四日の部落(本組)総会の申合規約なるものがある。集落協同体の一端がうかがわれるので、これを付記したい。

部落申合規約

第拾条 揃イ方

当組ノ者ヨリ相図トシテ大組長場備付ノ貝イヲ聞取ル得ル処迄至リ吹立耆番員ニテ出席ヲ督促シ後耆時間及至耆時三十分ヲ経過シ式番員ヲ吹キ立ル吏前同様ニテ貝吹キ其家エ帰リ来ルヲ限トシテ各組小組長ハ其部落内之出席人員ヲ取調不来者有ル時ハ罰則ヲ喫シ処分ス

第拾参条 草履下駄ノ取締

戸主タル者部落会又ハ分散寄合其他寄合ノ場所ニ出席スル際他人之草履下駄等ヲ履キ替ル事ヲ得ズ又自分ノ草履又ハ下駄ヲ隠ス支ヲ得ズ若替ル者是有ル時ハ罰則ニ喫シ処分ス

第拾四条 寄合酒席ノ取締

村方寄合之時酒席ニテ酔狂人出来タル時ワ其組之者集リ酔醒スル迄筵巻又ハ便宜方法ヲ以テ処分スルモノトス

第拾五条 罰則

第參条ノ無断遅刻者 疋度ニ金貳拾錢

第拾參条違反者 一度毎ニ片足拾錢
兩足五錢

但被替品ハ品主ニ返サシム

右条項確約之件承諾候也

右明治參拾陸年旧八月十四日締結ス

以上は大味川本組の永代日記による集落規約・申合せ事項の抜粋であるが、恐らく当時村内各集落とも、大同小異であつたであろう。大味川六人衆以来、大味川村の庄屋の所在地として、多分に住民の自尊心も強く、集落の運営に並々ならぬ苦心のほどがうかがわれる。他に範たる心構えと当時の農民の暮らしの一端をも知ることができる。そして、その日記に、永代の文学を冠し、一〇〇年になんたとする今日まで残している意義もまた大である。堅苦しさは当然として、一種のユーモア感さえある明治中世の様相を懐かしみ、感無量である。

先哲の残した農民の生活史の一こまである。

(四) 杣川村の節儉の実行

明治三十五年（一九〇二）ごろは、明治三十七・八年戦争（日露戦争）の前夜でもある。軍備の拡充は、税金の重圧を余儀なくし、さらには、国民生活を圧迫し、国民はできうる限り、生活を切りつめざるをえない状態であつた。

村（和川村）としても、時勢の推移にこたえるべく、進んで節約の布告をなし、村民の消費生活に、一段の主旨徹底に努めたものと考へられる。

節儉実行ノ件

説明

近年凶作及物価下落且ツ世ノ進歩ニ伴ハレ諸税金負担義務多端ノ場合貧富ヲ問ハス時勢ニ連レ奢ヲ重ズル兆ナキニ非ス示后ノ困難言ヲ俟ス依聊カ此ニ節儉ヲ加ントスルニアリ

本按ハ日時ヲ延遷為スベカラサル必要ヲ感ス依而左記各項記載ヲ確守シ若シ之ニ抵触ナス者有バ相当資産ヲ有スル者ト例シ議員職權ヲ以テ相当ノ処置ヲナスモノトス

- 一 本規約ハ本年四月ヨリ勵行シ向三ケ年トス
- 二 興行類一切右年限中ハ停止スルモノトス
- 三 諸祭礼ハ総テ客ノ交通ヲ禁ス
- 四 絹布類新タニ購入ヲ禁ス
- 五 身元不相当ノ飲食並衣服着用ヲ禁ス
- 六 佛事ノ場合ハ貧富ニ不抱酒用ヲ禁ス
- 七 普請及年賀其他祝意ヲ表スル場合貧富ニ不抱酒肴奢ヲ禁ス
- 八 不経済ト認ムル件ハ互ニ制シ公私ノ別ナク交互注意ヲ加ヘ示后公益ヲ計リ尚繁榮誓フモノトス
- 九 諸勸係化物ハ一切右年限中謝断ス

但シ従前ノ契約済ノ分ハ此限りニ非ス

右各号異儀ナク確定候也

明治三十五年三月廿一日 確定

出席議員

菅	武作	遠藤	又七
松本	光五郎	三浦	民二郎
八幡	留次	高岡	繁藏
友田	敬次郎	高岡	市衛
日野	弁次	石川	房五郎

この文章で、「議員ノ職權ヲ以テ相当ノ処置ヲナス」とは、明治時代の言葉として、実に重々しく、その他、「貧富ヲ問ハス」「身元不相当」そして「相当資産ヲ有スル者」などは、当時の農民の生活のうちに、暗黙の格差があったことがうかがわれる。

当時の村会議員が、議員みずからの提案で、国事の多端、しかも不況の中での生活改善に進んで取り組んでいた節儉の実行の具体的事項は、今においても銘すべきものがある。

第二章 今の生活

一 中流意識

農業が暮らしの基礎であった戦前（昭和二十年以前）の村内の生活水準は、おのずと上下の格差があった。地主があり、小作人があり、経済的な違いは、暮らし向きはもちろんのこと、他のあらゆる面でも、顕著に表れていた。

戦後の農地改革は、不在地主を無くして小作人を一掃し、自作農となり、民主主義は、あらゆる分野で、人間平等を打ち出した。

昭和三十五年（一九六〇）池田勇人内閣は、国民所得倍增計画を決定、いわゆる高度経済成長政策を開始、その波は順次この山間にまで押し寄せ、雑穀農家のほとんどが、農業を捨てて都市へ工場へこの地に残りし者も、賃金労働者として、サラリーマン化し、生活がほぼ均一化してきた。つまり、村民の多くは、中流意識をもつようになった。

経済の成長過程で、国民の生活水準は飛躍的に向上した。もちろんこの面河村でも、その例外ではない。所得水準・栄養・耐久消費材・住宅事情・通信（電話）・進学・労働時間などのいずれをとってもそうである。

消費の生活面でも、均質化の傾向がみられる。例えば食生活では、昭和四十五年前には、町村部では、米・麦を食べる率が高く、肉・パンを食べるのは、圧倒的に都会の世帯に片寄っていたのに、昭和五十年前には、町村部で

も、肉、パンを食べる世帯が増えている。全国的に、生活の様式や、水準が均質化してきているわけである。こうした暮らしの変化を背景に、国民の「中流意識」は、強まっている。

昭和三十七年国民生活センタ―が、二〇代の人々に、一〇年後の暮らし向きを聞いたところ、中流と予想する人が、八三％いた。昭和四十七年になって、みずから中流とする人は、三〇代で八九％あつた。

かつて、中流階層の特徴は、消費性向の高いことだつた。ほとんどん物を買ひ込み、ほとんどん消費することによつて、上流階層に近づこうとする傾向が強かつた。つまり、使い捨ての時代である。

しかし、経済の低成長期に入ると、それに適応した生活態度、つまり、現在はこれでよい。これ以上余り新しい物を買わない、そうした意識の人たちが多くなつた。これを「新中間層」と呼んでいる。

また、最近経済の安定成長ということが、よくいわれる。これは、高度成長経済に比べて成長率が半分になつた経済をいう。しかし、安定という言葉に惑わされて、生活も物価も安定した好ましい状態であるという錯覚に陥りやすい。でも、現実には、企業はもうからず、失業者は増え、賃金が上がつても、物価が上がるといふのが、安定成長経済の姿である。

近年、国民の、あるいは村民の生活水準は著しく向上した。その九〇％は、中流意識をもっているかも知れぬ。年収が一〇〇万円に満たない人でも、その多くが、中流と意識しているという現実を直視しなければならぬ。

さて、現在の面河村の暮らしは、ある意味での出発点であるかも知れぬ。ゆめ後退してはならぬ。それには卓抜した思考と時代の推移を洞察した施策を必要とするであらう。

二世 相

(一) 外来語の氾濫

朝のインスタントコーヒーから、夜のナツメロ（なつかしのメロディ）に至るまで、現在の日本（面河）は、外来語・和製英語が、はんらんしている。そのため「日本語が乱れる」との声も多いが、一方では、日本語は、外来語を巧みに取り入れ、それによって、その表現を豊かにしているともいえる。

テンブラ・カップ（含羽）・ジバン（襦袢）・シャボン（石鹼）・マント（フランス語）・ノルマ（ロシア語）などの言葉はみな日本語の中に溶け込んでいる。一口に外来語といっても、テレビタレント・ハイセンスなどは、和製外来語である。

オートバイ・ガソリンスタンド・ダンプカー・バックミラー・ルームミラーなどの物の名、オフィスレディー（O・L）・ベッドタウン・ナイターといった珍造語は、日本人にしか通じない。テーブルスピーチが、和製英語であると気付いている人は、少ないのではなからうか。

コミュニティー・ボランティアとかの片仮名の言葉が盛んに使われているが、それは在来の日本語では表現できない、新しい内容を持った言葉である。

特に最近、テレビの普及、交通機関の発達により、近くは松山近辺の言葉、遠くは、京阪神の言葉も、その独特のアクセントは別として、山間面河の言葉と、その差異は見いだしたい。つまり、それだけ地方の古い言葉が消え去ったのである。そして、普通の会話にも、外来語・和製英語が、ぼんぼんと飛び出す。片仮名言語の影響は、量り知

れないものがある。

(一) インスタント食品

インスタントとは、即時の意味である。インスタント食品は、今流行の即席麵めんに代表される。現在、年間生産される即席麵は、四一億五〇〇〇万食、赤ちゃんから年寄りまで、実際に食べない人をも含めて、平均一人四〇食以上、最近のブーム食品である。

即席麵は、いわゆるインスタントラーメン、昭和三十三年、チキンラーメンという名で、一袋三五円、まず大阪地方で発売、それが種類もずいぶん豊富になって、焼きそば・みそ汁・きつねうどん・中華めん・和風そば・うどんなどと増えてきた。

昭和三十年代の中ごろから、テレビが急激に家庭に入り、テレビでP・R（パブリックリレーションズ）すると、たちまち売れ行きが伸び、その販売先は、スーパー（スーパーマーケット）が、圧倒的に多い。

現在、九三・八%の世帯が、即席の麵類を食べており、買った場所の八四・九%がスーパーと答えている。その消費実態は、一世帯平均一三個、年齢別にみると、十代の後半が最も多い。

学校給食、インスタント食品になじんだ若者は、しだいに、手作りの味、おふくろの味を忘れていく。ともあれ、その善悪は別として、インスタント食品は、農山村までもふうびした食生活の大革命である。

(二) ラジオとテレビジョン

日本の放送事業は、「ラジオ事業の経営は、民法に基づき、非営利の公益を目的とする社団法人によるべきもので

ある」という、逋信省令により、大正十三年から、同十四年にかけて、社団法人、東京・名古屋・大阪の三放送局が設置されたのに始まる。

東京放送局は、大正十四年三月一日、東京芝浦の仮放送所から、ラジオの試験放送を開始し、同二十二日正式放送を始めた。大正十五年八月、社団法人日本放送協会（戦後の略称NHK）が成立。昭和二十五年六月、電波三法の制定によりNHKの独占的な放送事業経営に終止符を打った。これによって、民間ラジオ局（民放）が誕生した。これは後のテレビジョン事業においても同様である。

ラジオ放送は、数々の話題を提供した。昭和十一年二月、二・二六事件の際、東京戒嚴司令官香椎陸軍中将の布告「兵に告ぐ、今からでも遅くない……」、それがNHKアナウンサーの名放送として語り伝えられている。

………朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ対シテ其ノ共同宣言（註・ポツダム宣言）ヲ受諾スル旨通告セシメタリ………

昭和二十年八月十五日正午、太平洋戦争終結、日本の無条件降伏を、天皇みずからラジオを通じて、「爾臣民ニ告ぐ」と放送された。

昭和二十七年四月、連続ラジオ小説「君の名は」の放送が開始され、津々浦々に驚異的な人気を集め、その放送時間帯には、全国の女風呂（銭湯）が、空になったと語り伝えられている。ニュースはもちろん、スポーツなどの実況放送にも定着した。しかし、ラジオは、テレビジョンの普及につれて、一般家庭には余り利用されず、現在では、自動車、災害時、気象通報など、特にディスプレイジョッキー（DJ）は、若者に絶大な人気がある。

昭和二十五年ごろから、テレビジョンの開発は着々と進められ、昭和二十七年NHKは、テレビジョンの試験放送を行い（試験放送の映像は、片仮名の「イ」であった）、昭和二十八年二月（一九五三）NHKテレビジョンの本放送（東京地区）を開始した。一日約四時間、受信契約数八六六であった。そして同年八月、日本テレビ株式会社が民間テレビ（民放）

として放送を始めた。

愛媛県下のテレビ放送は、昭和三十二年五月、NHK四国本部（松山）が放送を始め、昭和三十七年教育テレビを従来（総合）と異なる電波で併せ放送した。特に教育テレビの目玉ともいえる学校放送番組は、教育の機会均等という点で画期的な役割を果たし、その他の教養番組は、家庭の主婦にも、居ながらにして、料理・手芸・外国語などを学ぶ機会を与えてくれた。なお、昭和三十五年九月、今までの白黒とともに、カラー放送を開始した。

県下の民間テレビは、昭和三十三年十二月、南海放送株式会社が、昭和四十四年十二月、愛媛放送株式会社が、それぞれ放送（UHF）を始めた。

現在（昭和五十四年四月）全国のテレビ受信機は、二六二二万七〇〇〇台（カラー受信機二二二万六〇〇〇台）、対人口普及率は約二四％である。面河村内の受信機は四八八台（カラー受信機三七五台）、対人口普及率は、約三〇％、全国平均を上回っている。なお、テレビ受信料は一か月白黒四二〇円、カラー七一〇円である。

このように、テレビの普及は、生活上の一大革命であり、またテレビは、生活必需品ともいえる。国内はもちろん世界のニュースは、即刻映像とともに伝えられ、民間放送のCM（コマーシャルメッセージ・広告アナウンス）は、暮らしの均一化をもたらし、娯楽においても、すべての分野で、一流か二、三流どころが写し出され、都会も田舎もなくなり、旅回りの芸人は逐次姿を消した。

昭和三十九年（一九六四）、第十八回東京オリンピック大会女子バレーボール優勝戦で、ソビエト女子チームと東洋の魔女、日本女子チームとの試合は、テレビで放映され、全国の街角も人の往来まばら、テレビの前に釘づけされたほどである。

昭和四十七年（一九七二）二月、浅間山荘事件（連合赤軍と称せられた五人の若者が、長野県軽井沢浅間山荘に、人質をとり

籠城、警察が山荘破壊を含む強行作戦で、人質を救出、全員逮捕）なども、国民は終日、その攻防のありさまを、かたずを飲んでテレビに見入った。

日本のテレビが、一〇〇〇万台に達したのは、昭和三十七年三月で、そのころからテレビが生んだ流行語が、目だち始めた。「ハイそれまでよ」「いいからいいから」など。

テレビが、二〇〇〇万台に達し、全盛を迎えたのは、昭和四十五年ごろで、テレビのCM（民間放送）が流行語の主流にさえなってくる。「三分間待つのだぞ」。

近年テレビの子供向けCMに対する風当たりが厳しくなっている。生まれた時から、テレビ番組の洪水の中で過ごす子供ら、よかれあしかれ、今の子供は一週間に平均二〇時間近く、テレビを見ていたとか。学校の授業時間よりも長いかも知れぬ。毎日午後七時ごろ、日本中の子供の八五％がテレビの前に。

CMは、けっこうおもしろくてきているともいえる。日常身の雑事を話しており、ごく自然な語り口であるから、耳に入りやすく、こんな商品もあるのか、こんな物も作れるかとか、感心したり、驚かされたりする。こうしてCMは、社会体験を豊かにするともいえる。

しかし、その反面、子供は、CMに使われる言葉だけをよく覚え、親との対話はもちろんのこと、視線さえも合わないように育っている。判断力を持たない子供を対象にした、テレビ番組のコマーシャルは、やめて欲しいとの要望すらある。

テレビを見るのは、読み書きのような特別な能力・思考・技術はいらない。しかも一日中、休みなく、何かが放映されている。テレビを見ない運動さえ起こりつつある。

しかし、テレビジョンは、ニュース・娯楽・教養・ファッションなど、あらゆる生活の分野に深く浸透している。

もはや、生活から、テレビを取り去ることは、できないようである。

四 流行語に見る世相

(1) UFO (Unidentified Flying Object) 未確認飛行物体

一九七四年、アメリカの飛行家が、空飛ぶ九個の円盤状のものを見たと報告したのが最初で、それから宇宙人侵入の空想に結びつけられた空飛ぶ円盤である。

昭和五十二年流行歌手ピノクレディーの歌「UFO」が大流行、幼児でさえアクションを入れて、「手を合わせて見つめるだけで……ユーフォー」。

(2) カラオケ

カラのオーケストラの意味で、歌詞なしの録音テープによる楽団演奏で、バー・スナック・喫茶店、さては日本料理屋に至るまで、ポータブルのカラオケを持ち込むようになった。伴奏つきで歌えるから、歌の好きな人には、こたえられない。そんな人の心理をみごとにつかんで、ブームを呼んだ。

(3) ネズミ講

鼠算式に会員を増やし、その会員の「子」や「孫」から続々金が入り、元金の何十倍ももうかるといふ触れ込み、今やその会員数は、全国で一五〇万人にも達するといわれる。しも、その被害者一〇〇万人とか。公序・良俗にも反し、数学的にも破綻の必然性があるとか。

無限連鎖講防止に関する法律（ネズミ講禁止法）が、昭和五十四年から施行せられることとなった。

(4) サラ金（サラリーマン金融）

大変便利になりました。

日歩13銭

●社会保険証・給与明細書
をご持参ください。

●利息は1万円に付、1日
13円。
日歩13銭、月3分9厘、
年利47.45%

(例) 10万円を30日使っても3,900円です。
支払いは自由返済方式

商業手形割引

★一流手形/年利8%~10%

金利引き下げ (日歩18銭)

(1月5日より)

★利息 (日歩18銭・月利5.4% 年利65.7%)

★貸付額 (5千円より20万円まで)

★支払い方法 (自由返済方式)

★貸付資料 (国保・社保・免許証・その他)

どれか一点

★初めての方、お気軽にお越し下さい。

ご相談に応じます。

日本消費者金融協会会員86007号

愛媛県庶民金融業協会会員865号

愛媛新聞所載

サラリー・ローン小口信用貸しで、無担保即融資のキャッチフレーズで、すぐ金を借りられる手軽な街の金融機関。

昭和三十年ごろ、団地族金融勤め人信用貸が、昭和三十五年ごろから、サラリーマン金融として定着した。

大手業者の推定では、全国で業者二万、利用者二〇万、貸付金一七〇〇億円という。

バーの飲代・不況に苦しむ零細業者の経営資金・さては主婦の家計のやりくり、学生に至るまで利用が拡大され、しかも法外な金利・過酷な取立て・サラ金地獄とまでいわれるようになった。無保証・無担保・健康保険証だけで、余りにも無造作に借りられるので、借りる側にも節度がなく、利息を払うために、また別の業者から借りまくる。結局払いきれずに悲劇を生む。子供までも巻き添えにした一家心中・離婚・退職などさまざま。昭和五十三年一月から、八月に至る間、サラ金悲劇による自殺者一三〇人、家出一五〇人。今やサラ金は大きな社会問題・自治省・大蔵省などが、その対策に苦慮している。

(5) GパンとTシャツ

GパンにTシャツ・髭ひげ・今やホテルだつてレストランだつて、このかつこうで、文句をいわれなくなった。健康で、楽しさあふれる感覚を、無理なくまかせるGパン・Tシャツ姿。

もともとGパンとは、日本で作られた俗語で、木綿の綾織物で作ったパンツ。アメリカ人の仕事着であったが、ラフ(粗雑)な感覚が、若者に人気を得て、現代を代表するファッションの一つである。

ジーパンに 藍アイを取られて 夏暑し

Tシャツは、綿・ジャージなどで作られた襟なし短袖のシャツ、男女のアンダーシャツ・スポーツウェアであるが、最近では、プリントもの、長袖ものも出回り、若者のカジユアルウェアとして人気がある。カットがシンプルで、Tの字のようであることから、この名が付けられたのであろう。

(6) トレパン

トレーニングパンツの略、運動競技の練習に用うる足首まである長いパンツであるが、上衣をも含めて、トレパンという。正式には、スポーツウェア・ウォームアップスーツであるが、トレパンの略称で通っている。生地は、ポリエステル・綿・色も多様、鮮やかなストライプ入り、一つのファッションである。運動競技はもちろんのこと、スポーツクラブのユニホーム・家庭着・子供の通学服、そして最近では、街着にまで、大流行した。子供から大人、男女の別なく。

(7) 二〇〇海里時代(二〇〇海里漁業専管水域)

一九四七年六月、南アメリカ、チリが世界で初めて、「二〇〇海里は、われらの海だ」と宣言した。沿岸国が領海(二海里)外に二〇〇海里(三七〇・四キロ)にわたり、漁業資源保存を理由に、外国漁船による、漁業を規制する水域をいう。二〇〇海里水域の面積では、日本は世界の七番目の広さである。

昭和五十二年(一九七七)政府は、二〇〇海里漁業水域法を公布した。

二〇〇海里問題は、日本漁業の命運をきめるものである。日本は二〇〇海里実施国から、日本漁船の漁獲割当を受

けることになった。

この新しい事態によって、日本漁船は大打撃を受け、現漁獲量約一〇〇〇万トン、そのうち約四五〇万トンは、外国沿岸、二〇〇海里以内の水域で捕っている。漁業関係者だけでなく、日本にとって、国民的な大問題である。

(8) Uターン

人口の逆流である。高度経済成長時代、農村を捨てて都市へ走った人々が、経済成長の減速時代に伴い、さらには生活環境悪化をきらって、山村へ帰ろうとする傾向をいう。そのみならず、地方から都市の大学に來ている学生の半数以上は、自分の育った土地で暮らしたいと望んでいるという。

しかし、昔は、それぞれの家に、子供に継^つがすべき生業があつたが、今はそれがない。サラリーマン化している。それゆえに、地方都市の市役所・町村の役場などに、若者が殺倒する。そうした限られた職場に失敗した若者は、また都会へ出て行かざるを得ない。それをOターン、又はQターン^{キター}という。

(9) 三種の神器

昭和三十二年ごろから経済界は、好景気、神武景気という。電化製品の流行、特に、テレビ・電気洗濯機・電気掃除機を三種の神器として、値段の高いこと、仕事の解放で、主婦のあこがれのまゝと。

昭和四十一年、カラーテレビ・クーラー・家用自動車（一〇〇〇CC以上）を、新三種の神器ともいい、別名3C時代ともいった。

(10) 家つき・カーつき・婆^ば抜き

昭和三十五年ごろの流行語、女子の結婚についての願望で、つまり、家があり、家用自動車があり、しかも父母と同居しないことが条件。

(11) 三ちゃん農業

経済の高度成長に伴い、青壮年の農業労働力は、就職・通勤、出かせぎなどの形で農業から離脱し、農業は、じいちゃん・ばあちゃん・かあちゃんの仕事となる。昭和三十八年ごろからの現象である。後に農作業の機械化が進み、二ちゃん農業、さらには、ノーちゃん農業とまでいわれるようになる。

(12) 恍惚の人

昭和四十八年有吉佐和子原作の小説の題名、さまざまな老人問題について述べている。昭和四十五年ごろから、クローズアップされた老人問題、これがこの小説により、一転して老人の代名詞ともなった。

(13) 狂乱物価

あらゆる物が、次から次へと波及的に価格が引き上げられ、その波及期間が短く、上げ幅が大きく、その落着きの見通しが立たないのをいう。そうした深刻な物価状況が目だった、昭和四十八年十二月ごろから使われた。異常物価の最も異常さが目だったこのころの物価は、前年比二九%高。

(14) オイルショック

昭和四十八年（一九七三）十月、第四次中東戦争で、アラブ諸国のとった石油戦略で、最も大きな影響を受けたのは、日本である。

基幹産業のほとんどを石油に依存している日本は、経済的に大打撃を受け、ついさきごろまで、昭和元禄の繁栄に酔っていたのが嘘のように一変した。

街ではネオンが消えたり、テレビも放映時間の短縮、企業は原材料のストックに狂奔し、市場の需要は、ひっ迫し、石油不足による物不足がクローズアップされた。

「トイレット＝ペーパーがなくなる」といった噂うわさにまどわされ、買いために走る主婦、一つのパニック状態である。

(15) 円えん 高たか

日本の「円」と、アメリカの「弗ドル」との基準相場の歴史は、明治四年（一八七二）に始まる。当時の明治新政府は、大胆にも、一ドル＝一円とした。

昭和三十年（一八九七）、新たに貨幣法を定め、一ドル＝二円、対アメリカ為替レートを、一挙に半分に格下げし、地金七五〇ミリグラム相当とした。その後、太平洋戦争の破局を経て、一ドル＝三六〇円という、固定レート時代もなった。

そうして、昭和四十六年（一九七二）、円はドルに対して、一六・八八％切上がり、一ドル＝三〇五円から、三〇六円の水準で推移した。その後円相場は、一九七六年から、円高基調に変わり、同年三月、三〇〇円を割り込んだ。そして昭和五十三年（一九七八）七月には、一九〇円台に円は高騰した。

こうした円高は、日本から外国へ旅行する人は、得をするが、一方円高は輸出不振となり、いわゆる円高倒産も出ている。

(16) 嫌煙権

たばこの害があれこれ説かれるにつれ、昭和五十三年から、嫌煙権という新語が広がった。辺りかまわずたばこの煙を吐き出すのは、たばこを吸わない人には迷惑千万、嫌煙派の人々の気持ちだが、この言葉で一気に吹き出した。

昭和五十四年一月、杜もりの都仙台市の繁華街で、「路上は禁煙しきれいなまちに」のスローガンで、延長九〇〇メートルの禁煙道路さえできた。

三 米相場の変遷

豊葦原とよあしはらの瑞穂みずほの国というのは、古来日本の美称である。それはまた農業国を意味し、稲は最も重要な作物である。稲の原産地は、中国・印度・アフリカとも伝えられ、栽培は印度支那半島・印度・ベンガル地方という説と、中国に起源して、日本に入ったという説がある。

米は主食であると同時に貨幣的にも重要な役割を果たした。

「石高いくだか」とは、豊臣時代の検地によって決定された、米（玄米）の標準生産高の表示方式であり、松山藩一五万石・柚野村二五二石二斗二升・大味川一五一石三斗四升などである。また、「持高」や「知行」の大きさ（草高）を表し、中大名・武士などの知行高をも表した。

主食であった米は、その普遍的価値を有することから、大化改新（大化元年・六四五）前より、田租の中心となり、封建時代（鎌倉幕府創設・一一八五）より明治維新（一八六八ごろ）までは、租税の主体となった。

しかしながら、和銅元年（七〇八）我が国に初めて貨幣ができていた。「和銅開珎わどうかいじん」と称し、銅銭である。こうした金属貨幣も、古代から穀物などの物品貨になんできた庶民の間ではなかなか使われなかつたようである。

このように、米は国民生活の安危にかかわるもので、米価は他の物価の基準となり、その調整に苦慮し、他面重農政策を施したが、農民は、ただ単に、米の生産者としてののみ、その存在価値を認められるにすぎなかつた。

江戸時代（一六〇三～一八六七）各藩の蔵米くらまいは、米仲買人により入札され、その代価に「銀」を支払った後、米を処分する蔵屋敷に保管を託し、その米に対する証券を受け取った。これを「米切手」（米の預り証）といい、こうした倉

庫を、米券倉庫といった。

この米切手は、本来米が蔵にあるものに対してのみ発行されるものであるが、後には、米商人の投機的取引と、藩の財政的理由で、蔵にない米にまで発行した。前者を「正米切手」後者を「空米初手」「過米切手」と称した。そして、この米切手は、貨幣同様流通した。

第一次世界大戦（一九一四～一九一八）が起こってから物価は高騰を続け、そのうち米価は、大正六年（一九一七）ごろから著しく高騰し、大正七年（一九一八）に入って、一升五〇銭を突破しようとした。大正七年八月三日、富山県下の漁村の主婦たちが、米を安くしてくれと叫んで蜂起したことをきっかけに、その騒動は燎原の火のように全国に広がった。世にこれを「米騒動」という。

昭和十二年（一九三七）七月六日、中国北京郊外蘆溝橋事件に端を発して、日華事変となり、昭和十四年、米穀強制買入省令により、米穀出荷命令が發布され、昭和十五年大都市で、砂糖・マッチの配給制実施、昭和十六年四月、大都市で、米穀配給通帳制となり、外食券制度が実施された。

米穀配給一日二合三勺、同八月物価対策審議会が、米価二重価格制による、米の増産政策を発表して、米の生産農家に奨励金を交付した。そして、昭和十七年食糧管理法が公布された。

太平洋戦争終了後、昭和二十一年物価統制令が公布され、米価を基準として、その生産者価格一石三〇〇円、これを基準に、生計費・賃金を決定、五〇〇円生活として、生産配給を統制強化した。

昭和四十四年九月、農政審議会が、米の生産抑制（減反）の総合農業政策を答申し、昭和四十五年一月、農林省は、米の調製配分つまり平均一・二％の減反を提示、米の生産過剰時代に入った。

食糧管理制度は、その内容を漸次変えていったが、米の統制は、太平洋戦争終了（昭和二十年）前後は、供出割当制

第2章 今の生活

一八〇四文化	一八〇一享和	一七八九寛政	天明
二元	三元	二元	三元
三七〇	四四二	三七〇	五五〇
五〇	〇〇五	五〇五	〇〇〇
		百姓の強訴を禁ずる	大雨洪水 大飢饉
		一八一八文政	文化
二元	三元	二元	三元
九七〇	四四五	四〇〇	五五〇
五〇	〇〇五	〇〇五	〇〇〇
越後地震 江戸大火災			

一八五〇	嘉永	弘化	一八四〇	一八三〇	天保
三二元	四三元	二九元	一〇九元	二三元	元
一一	一				円
六六一八	九〇八六	二〇九七	六二六〇	七四七四	銭
五二三	二九八	八八	三〇五九	二四	厘
	八米騒動	三人返し法(特農法)	九土佐名野川百姓一揆 約令	二総人口二、七二〇万人 全国飢饉	四水戸斉昭藩政改革を行 う
一八六八	明治	慶応	文久	安政	嘉永
六五四三元	三二元	三二元	元	六五四三元	六五四
三二二四七四	三三三	三三三	一四一六二	一四二〇八	一一一四
〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇
地租改正愛媛県誕生	久方山騒動	江戸幕府滅亡		二安政の大獄 二桜田門外の變	

四 現在の地価

昭和四十七年（一九七二）、時の首相田中角栄は、日本列島改造論を発表した。しかし、土地政策に事前策がとられなかつたため、地価のみが全国的に高騰し、世論の厳しい批判を受け、論議の段階で自然消滅した。これによる異常なまでの土地ブームは、容易におさまらず、全国平均三五・九％上昇、昭和四十七年度の高額所得者の上位は、土地成金が占め、企業の土地買占め、物価上昇が問題化した。

昭和四十八年、列島改造路線から、総需要抑制政策に転換したものの、依然として土地の高騰は続いた。

昭和五十四年一月、国税庁は、都道府県庁所在地の、最高路線価格（主要道路に面した宅地の標準評価額）を発表した。これによると、全国都市の最高路線価格は、地価上昇傾向を反映して、軒並みに上り、単純平均で昨年に比べ四・八％の上昇、昭和五十二年以来、三年連続の上昇である。

昭和四二	一九〇八〇〇〇	米の過剰時代にはいる
四三	二〇三二〇〇〇	
四四	二〇三二五〇〇	石錠スカイライン開通 米の買入れ制限、減反 の実施
四五	二〇四八〇〇〇	
四六	二一三〇五〇〇	
四七	二二三〇〇〇〇	土地ブーム
四八	二五六四五〇〇	オイルショック
昭和四九	三三八三〇〇〇	経済ゼロ成長元年
五〇	三八七〇〇〇〇	構造不況
五一	四一八〇〇〇〇	二〇〇カイリ漁業水域 設定
五二	四二八四五〇〇	円高 役場新庁舎、住民セン ター竣工
五三		大豊作 反収四八六キロ史上最 高

全国の最高は、東京都新宿区新宿二丁目の新宿通、二八八万円（一平方メートル）、四国の最高は、松山市大街道二丁目の、六一万円（二平方メートル）、これは全国で第十七位であり、昭和五十二年比、一〇五・二％の上昇である。路線価格は、相続税や贈与税の算出基準となるもので、時価の四〇〜五〇％がその水準といわれている。

昭和五十三年七月、愛媛県は地価調査を公表した。宅地は前年度に比べ、二一・八％、都市のみならず、農村部でも、上昇傾向を示している。

宅地の県平均価格は、三万二七〇〇円（一平方メートル）、市街化区域内の宅地の平均価格は、五万九一〇〇円である。最も高い宅地は、松山市湯渡町の六万七六〇〇円（二平方メートル）、商業地では松山市大手町二丁目の、三二万六〇〇〇円（一平方メートル）、面河村渡草学地区は、一平方メートル五七〇〇円である。

しかし、愛媛県の調査では、国の調査地区周辺の地区は避けているので、松山市大街道、銀天街などは、含まれていない。

林地の地価公示は、今治市医平山一四〇万円（二反）で県下のトップ、上浮穴郡久万町菅生古床谷口の六万五〇〇〇円（二反）、面河村柚野カジリの、六万円（二反）などである。

参考までに、上浮穴郡内の、主な地価は次のとおりである。

(1) 宅 地

久万町字水口	一三、〇〇〇円
久万町大字畑野川河合	四、〇〇〇円
小田町大字町村	一二、九〇〇円
美川村大字東川	八、五〇〇円

柳谷村大字落出	八、三〇〇円
面河村字渋草学	五、七〇〇円
(2) 商 業 地	

久万町字福井町	一四、七〇〇円
美川村字御三戸	一四、二〇〇円
小田町大字町村	一六、六〇〇円

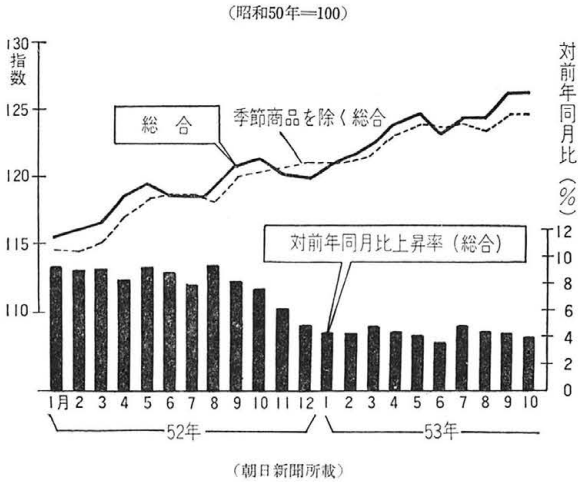
(以上いずれも一平方メートル当たり)

五 消費者物価

家計調査などに見いだされる消費支出の費目は、食糧費・住居費・光熱費・被服費・雑費に大別され、これを五大費目と呼ぶ。しかしながら、その消費構造は、所得水準により、大きな差がある。つまり家計費中に占める、食糧費の割合は、所得の大きいほど、減少するといふのである。これを、エンゲルの法則といい、この係数は、生活水準の比較や、合理的賃金算出の一つの目安として、使われる。

昭和二十一年消費物価指数(CPI)が作られた。総理府統計局は、消費者物価の比較基準となる年次を、昭和五十年(一九七五)に改め、今後は、昭和五十年が「二〇〇」となるわけである。昭和五十一年十一月の物価指数は、次のようである。

消費者物価沈静続く
 今月の東京都区部
 円高還元ちょっぴり効果
 消費者物価指数の推移（東京都区部）



町	中	全	区
村	都	国	分
			総
			合
			食
			糧
			住
			居
			光
			熱
			被
			服
			雑
			費

上のグラフは、昭和五十三年十月の東京都の物価指数である。

(註) 物価指数は、一定の期間に於ける物価水準の変動を測定するために作られた総合指数である。これは、過去や、現在の物価の動きを知るためばかりでなく、将来の物価の動きを予測するためにも利用される。比較する数値を「一〇〇」として比較すべき数値をこれに対する割合とする。

面河村の、現在の消費者物価を調査したものを次に掲げる。残念ながら、過去のデータとしては、あの時あれがいくらであったぐらいのもので、系統的に比較対照することはできないが、将来村内物価を論ずる場合、その基準として、参考に供したい。

なお、付け加えれば、明治二十五年（一八九二）度

第2章 今の生活

以降、面河村（和川村）予算書・決算書が残っているので、断片的に知ることが出来る。しかし、それは、貨幣価値の変動があるので、数字そのものを、現在の物価と単純比較したのでは意義がないかも知れない。

面河村の物価（昭和五十三年十二月調）

品目	銘	柄	単位	価格	備考
ストリープDHC			一台	一四、三〇〇	
温水器			一台	六、〇〇〇	
テレストレ	ビシャープ12型		一台	二〇、〇〇〇	
石油ストーブ	ビシャープSS6		一台	二〇、〇〇〇	
餅つき機	ビシャープFS271		一台	一六、〇〇〇	
螢光燈	ビシャープPLC605		一燈	三、〇〇〇	
掘ごた	ビシャープPLC62		一燈	三、〇〇〇	
電気カミソリ	ビシャープSHK250		一個	三、六〇〇	
電気ファン	ビシャープHAS187		一個	二、六〇〇	
やぐらごた	ビシャープ		一個	九、六〇〇	
電	球		一個	三〇〇	
コールドクリーム	球		一個	三〇〇	
香	油		一個	三〇〇	
ニ	ア		一個	三〇〇	
化粧石	花		一個	二八五	
歯磨	粉		一個	三五	
ズック	靴		一足	九〇	

品目	銘	柄	単位	価格	備考
地下足袋	テイッシュペーパー		一足	一、七〇	
チリ紙	紙		一箱	一五	
合羽	羽		一着	二五	
粉石	鹼		一箱	四七〇	
固形石	鹼		一箱	六七〇	
障子紙	紙		一箱	六	
トレーニングウェア	三		一箱	二六〇	
ジーンズ	三		一箱	二七〇	
マトリックス	チ(大箱)		一箱	二七五	
線	香		一箱	六	
もぐ	さ		一箱	二七〇	
ロ	ク		一箱	八〇	
七	輪		一箱	七	
L	ス		一箱	八〇	
灯	油		一箱	一七〇〇	
平タン(カラー)	油		一枚	七五〇	
長	靴		一足	一八〇	

(久万農業協同組合面河支所)

ミ	紅	缶	う	そ	か	天	小	こ	牛	ハ	缶	茶	砂	ラ	マ	ス	タ	弁	冷	魚	卵	焼	フ	中
ル			ど	う	ん	の	麦	に	に		ユ			1	ヨ	パ			水			肉	ラ	華
			め	び	ょ		ゃ				1			メ	1	テ	パ						理	パ
ク	茶	詰	ん	ん	う	り	粉	く	肉	ム	ス	糖	ン	ズ	イ	箱	筒	焼	焼	器	ン	鍋	経	
雪	リ	大	経	経	中	三	日			丸	森	面	経	明	日	経	経	経	経	経	経	経	経	
	プ	洋	濟	濟	國	清	製	⑤				河	濟	星	清	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	
	ト	漁											食	一	製									
印	ン	業	連	連	乾	屋	粉		大	永	産	連	品	1	粉	連	連	連	連	連	連	連	連	
一、	二	二	二	四	一			四	一	二			八	三	三									
、	五	五	五	〇	〇			〇	パ	五			五	〇	〇	一								
〇〇	〇	〇	〇	〇	枚	kg	丁	g	ッ	〇	kg	kg	g	g	g	個	個	個	個	個	個	個	個	
一、	三	三	三	八	六			六	三	〇	四	三	三	一	二	一								
、	五	五	五	四	八			〇	六	〇	〇〇	〇〇	〇〇	九	二	二								
〇〇	〇	〇	〇	〇	〇			〇	〇	〇	〇〇	〇〇	〇〇	九	二	二								

鶏	ワ	ネ	エ	鹹	過	桑	塩	消	骨	油	化	硫	苦	有	林	ソ	味	米	食	醬	り	玉	人	ご
	ク	オ	グ		り	特	化				成		土	機	地						ん	ね	ぼ	
	チ	テ	・	酸	石	一	加	石	か	二	石	肥	肥			1								
糞	ン	ス	(17)	塩	灰	号	里	灰	粉	す	号	安	灰	料	料	ス	噌		油	油	ご	ぎ	参	う
経	経	経	経	経	経	経	経	経	経	経	経	経	経	経	経	イ	義	経	経	経	経	一	〇	一
濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	カ		濟	濟	濟				
連	連	連	連	連	連	連	連	連	連	連	連	連	連	連	連	リ	能	連	連	連				
一	二	二	二	二	二	二	二	一	一	二	二	二	二	二	二	三	一	一						
袋	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg	袋	袋	kg	kg	kg	kg	kg	kg	ml	kg	kg	ℓ	ℓ	個	kg	g	kg
三、	三、	一、	一、	一、	一、	一、	二、	二、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	九、	五、	五、	三、	三、	三、	三、	三、	三、
〇〇	〇〇	〇五	〇五	〇五	〇五	〇五	〇〇	〇〇	〇五	〇五	〇五	〇五	〇五	〇五	〇五	〇六	〇六	〇六	〇六	〇六	〇六	〇六	〇六	〇六
〇〇	〇〇	〇五	〇五	〇五	〇五	〇五	〇〇	〇〇	〇五	〇五	〇五	〇五	〇五	〇五	〇五	〇六	〇六	〇六	〇六	〇六	〇六	〇六	〇六	〇六

茶畑用

品目	銘柄	単位	価格	備考
清酒	酒おもご特級	一・八ℓ	二、〇〇〇	
清酒	酒おもご一級	一・八ℓ	一、四九五	
清酒	酒おもご二級	一・八ℓ	一、〇〇〇	
焼酎	ルキリ	六三三ml	二、三三五	
焼酎	耐	一・八ℓ	九〇〇	
焼酎	耐	一・八ℓ	七〇〇	
焼酎	耐	一・八ℓ	六四五	
缶ジュ	スベ	二五〇ml	一〇〇	
品目	銘柄	単位	価格	備考
瓶	コカ・コーラ	二〇〇ml	五	
瓶	コカ・コーラ	二〇〇ml	五	
瓶	サントリ	七六〇ml	二、三三五	
瓶	サントリ	七六〇ml	七六〇	
瓶	サントリ	七六〇ml	七二〇	
瓶	サントリ	七二〇ml	七二〇	
瓶	サントリ	五五〇ml	四〇〇	果実酒

酒類

(高須賀酒店)

動力機	一輪	一輪	百キ	トツ	耕耘	スミチオン	ヒノポリ	オリゼメート	メゴ	グラス	石灰
機	車	車	秤	秤	機	乳	粉	粒	粒	粒	硫黄
経	経	経	経	経	経	経	経	経	経	経	合剤
	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	經
	B										
	140	連	連	連	連	連	連	連	連	連	連
	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
	台	台	台	台	台	台	台	台	台	台	台
	毛	五、〇〇〇	四、三〇〇	二、七〇〇	二、〇〇〇	三、〇〇〇	二、〇〇〇	九九五	二、三四五	一、〇〇五	三、三三五
	B付		Bなし								一、八〇〇
大根	ほうれん草	縄床	温し	む	寒	剪	防	剪	発	背	
種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	負
子	子	紙	ろ	紗	ミ	ク	機	機	撒		
経	経	経	経	経	経	経	経	経	経		
	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟	濟		
	連	連	連	連	連	連	連	連	連		
	一	一	一	一	一	一	一	一	一		
	袋	袋	丸	枚	個	個	台	台	台		
	九〇〇	五〇〇	八〇〇	一、八四〇	九〇〇	一、九〇〇	二、四〇〇	七三〇	三、七〇〇	五、〇〇〇	二、〇〇〇

飲 食

品 目	う どん 中 華 そ ば カ レ ー ラ イ ス	価 格	二〇〇 二五〇 三〇〇	備 考	
品 目	焼 餅 お 親 子 人 井 飯	価 格	三〇〇 三〇〇 五〇〇	備 考	

(貴福食堂)

タクシー料金

(面河タクシー渡草営業所)

基 本 料 金	御三戸まで	二七〇	備 考	
基 本 料 金	関門まで	二七〇	備 考	
基 本 料 金	渡草から 松久山まで	二八〇 三三八〇	備 考	
基 本 料 金	渡草から 小黒網まで	一、六八〇 一、二八〇	備 考	

散髪料金

(ちより理容室)

大 人	丸 調 髪 顔 婦 人 カ ッ ト 剃 刈 ト 髪	一、一六〇 一、一〇〇 九八〇	備 考	
高 校 生	丸 カ ッ ト 刈 ト 髪	一、一〇〇 一、〇〇〇 五〇〇	備 考	
中 学 生	丸 カ ッ ト 刈 ト 髪	九〇〇 九〇〇 九〇〇	備 考	
小 学 生	丸 カ ッ ト 刈 ト 髪	八〇〇 八〇〇 八〇〇	備 考	

第2章 今の生活

往復はがき	郵便書簡	定形郵便物
	二五〇まで	二五〇まで
四〇〇	二〇〇	五〇〇円
速簡書留(現金)		
速達	簡易書留	書留(現金)
二五〇まで		
一五〇	二〇〇	三〇〇円
通常郵便物		損害要償額一〇万まで

郵便料金

(面河郵便局)

峰	マイルド	セブン	チエリ	ホー	ビー	ビー
フィルター	フィルター	フィルター	フィルター	フィルター	フィルター	フィルター
二〇本	二〇本	二〇本	二〇本	一〇本	二〇本	一〇本
一七〇	一五〇	一五〇	一五〇	七五	一五〇	七五
ル	しんせ	ゴールデン	わか	きき	エ	ハイ
ナイ	フィルター	フィルター	フィルター	フィルター	フィルター	フィルター
二〇本	二〇本	二〇本	二〇本	二〇本	二〇本	二〇本
一五〇	七〇	四〇	八〇	九五	七〇	一二〇

たばこ料金

おれ	しゃ毛	乳
コールド	染料	幼児
二、三〇〇	一、八〇〇	一、〇〇〇

六 国の予算と暮らし

昭和五十四年度の国家予算案は、次のとおりである。

一般會計	三八兆六〇〇一億円	前年度比一二・六%増
国債発行額	一五兆二七〇〇億円	〃 三九・〇%増
		(依存率 三九・六%)
国債費	四兆〇七八四億円	〃 二六・六%増
公共事業関係費	六兆五四〇一億円	〃 二〇・〇%増
社会保障費	七兆六二六六億円	〃 一二・五%増

国民の暮らしと、直接関係のあるものは、教育・医療・住宅・福祉・公共料金・税金であるが、そのうちの福祉、公共料金・税金の一部の数字を掲げて、参考に供したい。

祉		福	
厚生年金給付	加入二十八年	低所得者の児童手当	月
国民年金給付	加入二十五年の夫婦	生活扶助	月
老齢福祉年金	月	障害福祉年金	月
	八八、八八四円	一級	月
	一八、〇〇〇円 (面河村は七十歳以上年五、〇〇〇円)	二級	月
		一級	月
		二級	月
			月

公 共 料 金 ・ 税 金			
米	国	煙	ガ
			ソ
			リ
			ン
鉄	草	税	車
			税
一〇K	三、一二五円	昭和三十四年五月一日実施、八%増収の為実施	ハイライト
		新幹線東京↪新大阪一万円強	マイルドセブン
			一八〇円
			平均二二%値上
		昭和五十五年四月二十一日実施予定	
			一リットル一〇円強値上、昭和五十四年六月実施約二五%値上
			一、六〇〇ccが年約三四、六五〇円、昭和五十四年四月実施

七 出産・結婚・葬送

(一) 出 産

最近の我が国の出生率は、予想以上のスピードで減少へ向かっている。太平洋戦争終了後、いわゆるベビーブームの昭和二十二年から、昭和二十四年までの出生率（人口千人当たりにも生まれる子供の数）は、三四人から、三三人でピーク、その後しだいに減り続け、過疎・過密現象が問題になり始めた昭和三十年から人口減少が目立ち、昭和三十六年、一六・九人と落ち込んだあと、じりじりと上がり始め、昭和四十一年の丙午ひのえうまの一三・七人を別として、昭和四十八年には、一九・四人と少し伸びている。それが昭和四十九年になって、出生率は一八・七人に落ち、そして、一七・一人、一六・三人、昭和五十三年に至り、一五・五人と落ち込んだ。

面河村の昭和五十一年度の出生児は六人、出生率は約三・五人、全国平均の約四分の一であり、昭和五十四年度の新生児は、村内でわずか三名である。

また別の全国調査によれば、現在の出産可能な年齢の夫婦の子供は、一夫婦一・九人となっている。これは人口老齢化が進む中で、出生率の低下は、社会や経済の面で、大きな歪ひずみを残すものといわれている。

現在、世界では、毎秒四人の赤ちゃんが生まれており、その人口は、ついに四二億人を突破している。このままいけば、二十七年後には、世界人口は、現在の二倍の八四億に達する。これから二五年以内に、食糧生産を今の二倍に上げない限り、既にじゅうぶんとはいえない現在の供給水準が維持できなくなると、国連統計局は、警告している。

昭和五十二年厚生省人口研究所の調査によると、

(1) 夫婦の平均出生児数は、年々低下し、一・八九人である。

(2) 妻の考えている子供の数は、三人から二人に移行している。

子供は「二人以下」という考え方が、定着した。それは一時的な現象でなく、生活意識の転換である。これから、出生率が、大幅に回復することは、まずありえないのではあるまいか。

昭和五十三年三月、我が国の人口は、一億一四五四万人、このまま進むと、二、三十年先には、人口の減少が始まると予想され、五〇年後の一億四〇〇〇万人という従来の停止人口予想は、出生状況に変化のない限り、その修正は必要であろう。

母親の健康状態や養育の環境・地域の衛生状態によって、大きく影響される。乳児死亡率は、その国の衛生水準の指標といわれるが、昭和五十二年の死亡件数は、一万七〇〇〇件、死亡率は、出生児一〇〇〇人に対して九・三(三一分に一人の割合)で、世界でも低率グループのトップである。

今の面河村で、初めて赤ちゃんを産むと妊娠中の健康診断や入院分娩料^{ぶぶんりょう}だけで約一七万五〇〇〇円、それに、ベビーベッドなど、母用品代などの間接費を加えると、二〇万円を軽く越すというのがだいたいの平均した経費である。

最近の例をみると、健康診断が九回で、一万九八〇〇円(一四万二二〇〇円)、入院分娩費一五万円(七日間)、計一六万九八〇〇円である。なお、直接費以外に、交通費・妊婦服(マタニティドレス)・ベビーベッド・その他、母用品の購入費の比率は高く、出産後一か月を限定しても、初産婦で約五万円、産前産後(授乳期九か月)の食費の増加分が約八万円といわれている。

これらは、現在の面河村の一般的な実情であるが、当村で産婆(助産婦)の手で出産するようになったのは、昭和

十年ごろからで、ましてや、松山市などの病院での施設分娩は、昭和二十五年以降からである。

それまでは、妊娠中の健康診断はもちろんなく、出産ぎりぎりまで炊事・洗濯・農作業、出産は自宅で、部落の年輩の婦人に取り上げられ幼児はすべて母乳、こうした出産・育児が、よければあたりまえ、悪ければ不運、おおかたは、天命、自然の成り行きに、任さざるをえなかった。

それでも、赤ちゃんは育っていった。今から考えるとずいぶん、むちゃな時代であったかも知れぬ。

昭和四十九年ごろから、療原の火のように母乳主義運動が広がってきた。授乳は母と児のスキシンツプの最たるもの、それが昭和四十年代の初めごろから、高度経済成長期の中で、ひたすら物質文明が讚美され、合理主義が追求され、母乳離れを促し、母乳のピンチヒッターであるはずのミルク（特殊調製粉乳）がその主役に躍り出てしまった。それが「自然に帰れ」の一つとして、母乳運動を唱えられるようになった。そして現在、母乳党が、四〇％程度と、推計されている。

ここに、出産について、次の三つのことを、併せ記したい。

(1) 五つ子誕生

昭和五十一年一月、鹿児島市立病院で、日本で初めての五つ子が誕生した。父親は東京NHK放送記者（妻親子）である。排卵誘発剤が話題になった。

男二人、女三人、極小未熟児だったが、医師団の苦勞のかいあって現在五人全員順調に発育し、全国から祝福されている。

(2) 人工受精児

東京慶応義塾大学医部の附属病院で、昭和五十二年一年間に、約六五五人が人工受精（配偶者間）を受け、そ

のうち、四〇%から四五%が妊娠した。昭和二十四年八月、その第一号の赤ちゃんが誕生して以来、同病院で生まれた人工受精児は、今日までに五〇〇〇人を越えるという。

(3) 試験管ベビー

昭和五十三年六月、イギリス、オールダム病院で世界初の体外受精児が誕生した。女の児でルイーズちゃん。医学の勝利か、反倫理か、試験管ベビーをめぐる議論が沸騰した。

さて、親は、子供の将来の生き方について、約七〇%が「平凡でもいい、家族と楽しめる生活を送って欲しい」、そして「思いやりのある子」が「勉強のできる子」をはるかに引き離しているが、これは、本音が隠されているのかも知れない。

さて我が国は、明治時代から妊娠期間を独特の「月数」で表示してきた。実際には、赤ちゃんは、満九か月で生まれるのに、今の数え方「一〇か月」は満一〇か月と混同される。妊娠何か月という、日本独特の数え方が、世界保健機関(WHO)の勧告を受け入れて、昭和五十四年四月から「妊娠何週」に変えることになる。これも一つの変革である。

(二) 結婚

不況をよそに、結婚式は年々はでになってきた。ひろう宴もにぎやかに、平均的ケースだと、五〇人前後の招待客があるという。都会サラリーマンを中心とした若夫婦六〇〇組のアンケート調査(朝日新聞)によると、挙式前後の出納簿は、次のようなものである。

新郎二六・七歳、新婦二四・一歳、結婚に要した費用は、三三四万円、ただし双方の親の負担合わせて、一四四万

円、やはり親のスネカジリ型、デラックス結婚である。

その内訳はまずエンゲージリングなどの婚約記念品代が約三六万円、挙式、ひろう宴に一一五万円、仲人への謝礼六万七〇〇〇円、新婚旅行費用四九万円、家具・電気製品など約一一七万円となっている。

こうした結婚費用のほか、結納金や婚約に要した費用は一五七万円、そのうち、結納金は、見合組五〇万円、恋愛組三〇万円、平均三九万八〇〇〇円、新婚旅行は、国内五七・二%、海外三九・五%、海外旅行は、ハワイが四四%、グアム・サイパンなど二四・五%である。

昭和五十一年、厚生省の人口動態統計によると、その年の結婚件数八六万七〇〇〇件、これは人口千人比で七・七、三六秒に一組のカップルが生まれたことになる。同年の離婚は、一二万四〇〇〇件、これは大正時代の初期に次ぐ史上第二位、四分一五秒に一組が離婚している。つまり、新婚七組に一組は離婚していることになる。

大正初期の離婚の数が多いのは、女性の地位が不当に低く抑えられ、夫の側の一方的事情で離婚されたものと考えられるが、近年特に昭和三十年代半ばから離婚が、ぐんぐん伸び続けているのは、女性の意識と、生活能力の向上も一つの理由ではあるまいか。特に昭和五十一年から、結婚歴五年以上で、離婚する夫婦の割合が五〇%を超えており、長年連れ添った夫婦の離婚が多いのが特徴、「子は鎧ゆびがけ」の諺ことわざも、実態と離れているようだ。

ニューファミリーという言葉が、昭和四十五年ごろから使われ始めた。ヤング―独身貴族と呼ばれる昭和のベビーブーム生まれの男女が、結婚適齢期に達し、そして、彼らが、消費ブームの担い手としてニューファミリー運動の旗振りを行った。

- (1) 音楽が生活に溶け込んで込んでいる。
- (2) 家族で遊ぶ。

- (3) ファッションに対する行動が積極的。
- (4) 家族のファッションに関心が高い。
- (5) 家庭生活が洋風化。
- (6) 夫に家事協力を望む。
- (7) 夫とのコミュニケーションが密接。

これらのうち、四つ以上の条件を備えているグループを、ニューファミリーという。

太平洋戦争以前には考えられなかったすばらしい夫婦像が、どんどん生まれている。独身不自由からの人間的解放、子を持つゆえの人生的豊饒、互いに力を出し合い支えあって、その二人自身の生活方式がつけられていく。

面河村の結婚の歴史をみると、まず家と家との結婚であり、結婚式も家から家へ、その絆は、両家の家族総ぐるみで、深くこまやかなものであった。新婚旅行など、この僻地では思いもよらず、婚約は酒一升、結納金などほとんどなく、花嫁の荷物も極端にいえば、風呂敷包み一つ、全く簡素そのものであった。

豆腐・蒟蒻は手作り、野菜の煮込みなど、にぎにぎしき婦人たちの手料理、地酒をくみ交わすひろうの宴、今のような豪華さはないけれど、近親者、部落の人々、婦人子供に至るまで、多くの人々に心から祝福され、その和やかさは、捨てがたい貴さがあつた。そこには、えもいわれぬ、ほのぼのと、心の通じる暖かさがあつたといえる。

時は移り変わり結婚に対する若者の考え方の変わった現在、きまりきった形式も必要であらうが、もつと、アウト・ロー的なふんい気も必要ではあるまいか。

新しい結婚式の傾向として、海外（ハワイ・グアム）で結婚式を組み込んだ旅行代理店のウエディングバックが始まってから五年、昭和五十二年の利用者は、一三〇〇組という。費用は挙式こみハワイ（六日間）で、六〇万円、グア

ム(四日間)三四万円、白い小さい教会で、花に囲まれて厳肅に式を挙げ、とこな常夏の海辺の新婚旅行。日本での通りいっぺんの結婚式・ひろう宴は、全くいい印象ではない。と彼らはいう。

(三) 葬 送

数ある生物の中で、人間ほど永生きするものはない。蟬せみは夕暮れを待つて死に、夏の蟬せみは、春や秋を知らないというように、短命なものもある。

生物は死ぬまで生きている。しかし、ただもう、生に執着する心ばかりが深くなって、人の世の情趣を解することもできなくなっていくのは、全くあさましいといえる。

人の死亡率は、明治時代から多少の変化はあるものの、大勢は下降の一途をたどり、ここ数年の死亡率(人口千人比)は、昭和四十八年六・六、昭和五十年六・三、昭和五十二年では、死亡六九万件、その率六・二、四五秒に一人の割合で死亡している。

日本で最初に平均寿命を計算したのは、明治二十四年。明治三十一年の平均寿命は、男子四二・八歳、女子四四・三歳。この約八〇年間に、日本人の平均寿命は、ざっと三〇年延びたことになる。つまり現在、男子七二・一五歳、女子は七七・三五歳の喜寿に達した。これは、世界で屈指の長寿国、世界一の長寿国スエーデンが、昭和四十八年(一九七三)、男子七二・一二歳、女子七七・六六歳。しかし、この延び率は、ずっと落ちているため、その後の延び率を勘案しても、日本の平均寿命は、男子は世界の長寿一、二位、女子も五位以内に入るとは確実であると、厚生省はみている。

現在当村での葬儀は主として次の二とおり行われている。

1 仏 式

多くはこの方式である。波草薬師寺、直瀬浄福寺（袖野前組地区）の檀家である。寺の宗派は禅宗。最近の寺は、あの意味で、葬式のためにのみ存在する寺であるかも知れぬ。

戒名（かいみょう）は、法号ともいい、俗名と改めて授けられる名で、僧侶が死者につける名である。この俗世の記憶もいろいろ結びついている。この世の自分の名と別れるために戒名をつけるということも、考えられなくはない。院号と居士・大姉、これがみな、難しい漢字を使って、一般には余り親しめない。その戒名にも、いろいろランクがあつて、それぞれ相当の布施を寺に払うのである。

火 葬 料

久万町営火葬料 五〇〇〇円
美川村営火葬料 四〇〇〇円

（火葬の場合の入費、なお火葬にする場合は面河村から四〇〇〇円の補助）

祭壇設営料

四万円（その他に棺など、一式をそろえて約五、六万円）

久万農業協同組合の例である。

2 神 式

これは、宮司による葬儀である。こうした人を神徒と称し、その歴史も古く、中組、本組などで現在約十五、六戸である。

嘆 願 書

私等

神徒葬祭ニ就テ今般各自申合セニ依リ神徒葬祭用具買入致度候処経費多額ヲ算シ時局柄各々醸出金困難ニ有之候次第時局ノ応分ノ助成金下付ヲ乞ヒ以テ目的達成致度別紙見積書相添へ比段嘆願候也

昭和十年二月二十八日

面河村神徒

代表者 岡崎種芳

外三十名

面河村長 高岡宮吉 殿

別 紙

神葬祭用具買入見積書

葬具ノ部

一 五拾円 五色旗五本、壺本ニ付拾円

一 四拾円 紅白旗四本、壺本ニ付拾円

一 拾五円 蓋 壺ケ代

一 五拾円 柩掛絹 壺ケ代

一 八拾円 牙 壺封

樂器ノ部

一 六拾円 樂太鼓 壺ケ代

一 五拾円 笙 壺ケ代

一 五拾円 龍笛 壺ケ代

一 五拾円 箏 壺ケ代

葬祭料
五十日祭

かつては、すべて土葬であり、墓地の場所も、それぞれ勝手次第、それが大正時代の初期から、墓地は、おおむね小組単位の、一定の地域に限られた。

久万町・美川村に火葬場が設けられ、近年おおかたは火葬により、墓標も、先祖代々の墓として、しだいに一つにまとめられつつある。墓所の構えにはいろいろあるが、墓石そのものの価格は四〇万円前後が普通である。

形式に流れがちな葬儀や告別式のあり方に痛烈なる一石を投じたものに、近親者だけのごく簡素なものがあり、遺体焼却などの、市民的義務を果たす以外は、葬儀・告別式はいつさい致しませんとする。式のないものすら都会では、行われつつある。世間のしきたりに便乗するコマーションリズムにわずらわされず理にかなう人間精神によって行われる葬送の後味は、あるいは、さわやかな喜びかも知れぬ。

八年の瀬

季節の行事は、テレビのブラウン管、そして、デパートの売出しからやってくるこのごろである。

明治時代から大正時代、生活は決して豊かではなかった。しかし、正月を待つ心になにか豊かさがあった。女子は鞆ひびだらけの手で大根を洗う。男子は山に薪を負いに行く。障子も新しく張り替える。夜も明けやらぬうちに、餅をつく杵の音が、あちこちから聞こえてくる。きれいな下駄を買ってもらった子供は、正月を待ちきれず、畳の上で履いていた。

米屋・酒屋・金貸し、そうした連中が押し寄せて来る。守るも攻めるも皆必死の師走しわす(十二月)の、大晦日みそか、夜遅くまで、村々を提灯ちとうちんが行き交う、年の暮れの風景である。

しかし、今は全く違う。暮らしが変わった。暮らし向きはおしなべて、その内容は嘘でも、結構になった。苦しさも、そこは世間体、昔のような、一年の総決算らしい大晦日の攻防は、薄らいだ。昔に比べれば、人生模様の薄らいだ年の瀬だからこそ、歌番組（テレビ）に、うつつを抜かすのか。

今の正月らしさ、それは大晦日の夜のNHKテレビの「紅白歌合戦」と、新春の使者、全戸に配達される「年賀郵便」である。郵便、特に、「郵便はがき」による年賀の風習は、明治六年（一八七三）、初めて郵便はがきが発売されてからである。そして年賀郵便の特別扱いが全国的になったのが、明治三十八年である。

昭和六年の満州事変をきっかけに、戦争の拡大につれ、物資節約の見地から、その廃止が検討され、戦時体制が強化された昭和十五年、特別扱いが停止され、太平洋戦争終了後の昭和二十三年に復活した。そして、お年玉付き年賀はがきは、昭和二十四年から売り出された。

年賀郵便については、虚礼廃止・自粛などの論議がしばしば行われた。しかし「おおよそ虚礼でない礼はない」とは、ある人の見解、一般家庭でも、「礼節」は、ある意味で生活の知恵と同意語、生きる上で必要な儀礼かも知れぬ。年に一度の個性豊かな年賀状の字を読み、お互いの生を確かめあう、またなんともいえない楽しみであろう。反面、年賀状を書かないのは、人の道に反するなど、ばかげた論議にも、もちろん加担できない。

昭和五十三年、全国の年賀はがき発売数は、二七億五〇〇〇万枚、それに私製はがきも加わるが、差し出される総数は、約二七億万枚とか。（国民一人当たり約二五枚）

面河郵便局の、昭和五十三年の年賀はがき発売数は、四万九〇〇〇枚である。

NHKテレビの、紅白（男・女）対抗歌合戦は、昭和二十五年十二月三十一日の放送が第一回で、昭和五十三年十二月三十一日の放送は、第二十九回目である。

この生放送は、大晦日の夜を彩る国民的行事ともいえる。紅白を見て各地の除夜の鐘を聴き、お宮参りをするのが、現在の正月らしさの風景かも知れぬ。

歌謡曲は、老いも若きも子供に至るまで生活に密着している。演歌に人生の哀愁を感じ、ロック調のリズムに若者の血潮をたぎらせ、熱情を発散させる。人気歌手のアクションに子供は夢中になる。

紅白歌合戦は、歌手にとっては、その年の総決算である。古き人々は、改めてその息の長さを誇り、新人にとっては、その登龍門である。何百人の新人の中から、紅白の岸にたどり着くのは容易なことではない。毎年こうした新人歌手が、紅白に選ばれて涙を流す。これも、もっともなことである。

第三章 ふるさと祭り

この面河村で、愛着を持つ行事、あるいは村の伝統とは何か、これからの産業開発は、農村文化とは何か、ふるさと祭りは、これらを模索するためでもある。

高度経済成長期から、人口の村外流出、村内産業の変革など、あわたたしいこの十有余年間、今静かに、この郷土を、振り返つてみよう。

「見なおそう わがふるさと 面河村」これが面河村、面河村公民館などの共催で、昭和五十三年十一月二十三日開催された第一回面河村ふるさと祭りのスローガンである。

「心の豊かさを求めて、生活にうるおいのある文化活動が進められ、ふるさとの文化・伝統芸能を継承保存し、さらに、文化作品を創造発表することによって、我がふるさとのよさを見直し、連帯感を高め、豊かなコミュニティ、村づくりを進めたい。」以上がその基本方針として、うたわれている。

面河村住民センター大ホールの開会行事に、満堂の村民に対して、面河村長中川鬼子太郎は、次のように述べている。

高度経済成長期から低成長時代に移った今日、村を出て行った人々にも、ふるさと志向のきざしが見えつつある。残った人々も、わが面河の自然と歴史をふり返り、伝統文化のよさを探り、将来のわが村独特の産業の開発・農村文化の向上と更に自立と連帯という意識を根底において、新しい村づくりに協力いただきたい。

なお、こうした催しを、村民交流の場として、せめてこの一日をなごやかに過ごされたい。

住民センター、役場広場の会場には、村政のパネル・古木・書画・焼物創作品の展示・活花・写真・手芸品・みがき丸太・盆栽・野菜・不用品の即売なども行われ、ふるさと料理の売店も設けられた。

なお、それぞれの出品に対して、審査を行い、盆栽部門の菅茂盛（若山）以下、多数の者に賞状が贈られた。

住民センター大ホールでは、郷土芸能発表会・万才・獅子舞・民謡・舞踊・詩吟・扇舞などが、天狗連中によって、次々にひろうされ、拍手と爆笑の渦、演ずる者も、見る者も、子供から大人に至るまで、みんな一体となって熱気がただよった。

この日、集まった人々約五〇〇人、天高く秋の快晴に恵まれ、連山の紅葉一段と映え、白亜の役場庁舎・住民センターの建物とのコントラストが、すばらしかった。

このにぎにぎしさの中には、過疎を忘れ、自然美豊かに、情緒あふれる「ふるさと志向」を一段と高め、この郷土面河の未来に、何物かを探し求めようとする血潮が、意欲が、みなぎっているようにみえた。

